

あるじでえ

No.28

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492

◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959

平成5年3月15日 発行
平成12年6月 増刷

世田谷の庚申信仰

<はじめに>

前回の『あるじでえ No.22』では、庚申信仰の一般的な説明を行いました。その中では、庚申信仰の歴史・庚申信仰の崇拜対象・庚申講・庚申塔などを取り上げてお話ししましたので、庚申信仰の概略はおわかりいただけたと思います。今回は世田谷区内で祀られている庚申さまを紹介することにしましょう。

<世田谷の庚申塔>

世田谷区内の庚申塔に関してはすでに、世田谷区教育委員会から『世田谷の庚申塔』（昭和59年）と題する報告書がまとめられています。

この報告書には、世田谷区内の各地に祀られている庚申塔205基が紹介されています。その中で最も古いのは、上馬3丁目にある宗円寺（曹洞宗）境内の庚申塔で、明暦4年（1658）の年号が刻まれています。

庚申塔が最も多く立てられた年は延宝8年（1680）で、11基の庚申塔を数えることができます。延宝8年は庚申（カノエサル）に当たる年であることから、多くの庚申塔が立てられたのでしょう。

しかしながら、次の庚申の年に当たる元文5年（1740）に立てられた庚申塔は3基、その次の庚申の年に当たる寛政12年

（1800）に立てられた庚申塔は1基と、その数は多くありません。また、その次の庚申の年に当たる万延元年（1860）の年号が刻まれた庚申塔は、現在までのところ見つかっていないようです。



明暦4年の庚申塔

年号の刻まれている179基の庚申塔が、どの干支の年に立てられたのかを調べてみると、図1のようになります。この図から明らかのように、申の年に立てられた庚申塔が1番多いのですが、

それでも全体の2割にしか過ぎません。このことから、世田谷の庚申塔は干支にあまり関係なく立てられていると考えていいようです。

次に、庚申塔に彫られている像について見てみましょう。世田谷の庚申塔に彫られている像として最も多いのは青面金剛像で、その数は205基のうち139基あり、全体の7割近くにもなります。次に多いのが猿だけを彫った24基で、全体の約1割あります。この他、お地蔵さんを庚申塔として祀っているのが14基見られます。

めずらしいものとしては、^{しょうとくたいし}聖徳太子を彫った庚申塔が用賀4丁目にある真福寺（真言宗）境内に祀られています。また、文字だけを刻んだ庚申塔は27基で、「庚申塔」「庚申」「奉供養庚申」などの文字を見ることが出来ます。

図 1

干支	庚申塔の数
ね子	17 (9%)
うし丑	15 (8%)
うま寅	9 (5%)
卯	6 (3%)
たつ辰	14 (8%)
み巳	12 (7%)
うま午	7 (4%)
ひつじ未	14 (8%)
さる申	36 (20%)
とり酉	15 (8%)
いぬ戌	21 (12%)
亥	13 (7%)

＜庚申のご利益＞

前回の『庚申さまの話』で紹介した通り、庚申さまにはあらゆる願い事を祈りました。病気を治してくれるように、作物が多く実るように、悪いものが村や家の中に入り込まないように、お金がたくさんもうかるようになるなど、その内容は人々の生活全般に関わっています。

では、世田谷の人々はどんなことを庚申さまに祈っていたのでしょうか。

庚申塔が立てられている場所のほとんどは村の入口や道の分岐点であることから、世田谷でも庚申は道祖神として祀られていたことがわかります。おそらく、村内に悪霊などの災いが入り込まないように、村人の生活が安穏であることを願って、庚申塔を立てたのでしょう。

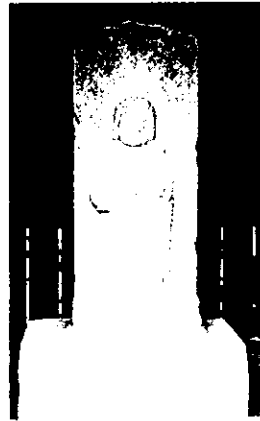
次に、庚申塔に刻まれている文字を見てください。

『世田谷の庚申塔』



地蔵の庚申塔

で紹介されている205基の庚申塔の中には、願い事の刻まれているものが39基あり



ます。その内容を調べてみますと、現世と来世の幸福を祈る「二世安楽」が最も多くて30基、次に「諸願成就」の5基となっています。

具体的な祈願内容に関しては、疫病が収まるように（馬引沢）、安産・縁結

び（喜多見）などの事例が報告されていますが、詳しいことはわかりません。実のところ、世田谷の庚申信仰に関しては、まだ十分な調査が行われてはいないのです。先に紹介した『世田谷の庚申塔』は庚申塔だけを対象にしたものであり、庚申講や庚申待ちなどに関しては報告されていません。

数少ない報告事例の中から、ここでは奥沢村と下馬引沢村の庚申講について紹介しておきます。

奥沢村の庚申講は字単位で行われ、60日ごとにめぐってくる庚申の日に、講のメンバーの1軒に講員が集まっていました。そして、持ち寄ったお金を集めてくじ引きをし、くじに当たった人が全部のお金をもらっていたそうです。宗教的講というよりは、むしろ経済的講の要素が強かったようです。

下馬引沢村の庚申講は寛文11年（1671）からずっと続いていると言われており、昔から住んでいる百名程の人々で構成されています。大正時代までは春と秋の庚申の夜に講元の家で庚申待ちを行っていました。現在では講の人達で、春と秋に親睦旅行に出掛けているということです。